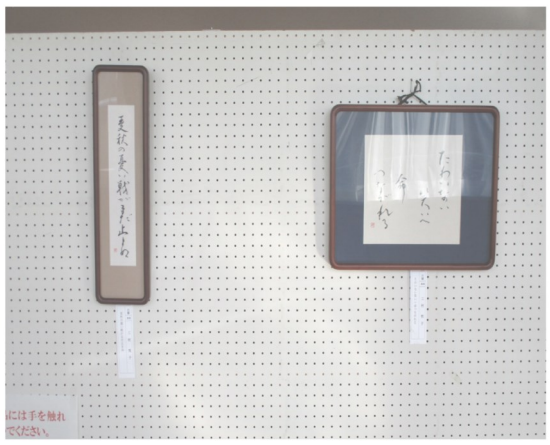
第6回ふるさとあずま作品展を開催しました

令和6年2月4日(日)～2月9日(金)まで東地区の方から募集した絵画、工芸、書道、写真、文芸の各作品の展示会を東公民館ホールで開催しました。



昨年に引き続き開催された作品展には、東地区に在住する10歳から98歳に至る幅広い年齢の皆さんから、69点の力作や秀作が出展されました。

出展作品は、東地区に関係するテーマ部門をはじめ、自由作品部門から日本画、洋画、はり絵、アメリカンフラワー、陶芸、書道、写真、川柳、創作物語など多岐にわたりましたが、いずれの作品も作者の息づかいや心象風景、感動の瞬間を切り取った心意気などが見て取れました。

一方で応募者はシニア層に特化している傾向があるため、次回からは児童生徒も含めた若い世代の皆さんからの応募に期待したいと思います。

（ふるさとあずま作品展担当：東公民館　川田）

ひな祭り

三月三日は、桃の節句「ひなまつり」である。

ひなまつりは、女の子の幸せや成長を願いお祝いをする。

中国の上忌節を起源とし、人の代わりに人形に厄災を払ってもらい、川に流す「流しびな」や、平安時代に宮中の女の子が遊んでいた人形「ひいな」等が由来となっている。

桃の咲く頃は、旧暦で三月三日頃であったので「桃の節句」とも呼ばれている。厄（災）除けの儀式とともに、子ども達の人形遊びと結びついていった。江戸時代になってからは、商家の人によって華やかなひな人形が作られたりして楽しい行事となった。

ひなまつりに関しては、それぞれの思い出がたくさんあるようだ。「利根西の民俗」から当時の方々の話をあげてみた。

二月は、あっという間に過ぎ、三月三日のひなまつりだ。海苔巻きや油寿司ができこれが楽しみの一つだった。母親たちは、二日の夜に節句の用意で忙しい。里芋や人参、ごぼう、かんぴょう、こんにゃく、ちくわ、するめの足などを煮付けた。時には、小豆を煮てあんこを作り餅をついた。

妹が産まれた時、節句に親戚等からおひなさまをもらったが、いづれも座りびなでおだいりさまのようなものはなかった。今思うと、不思議なおひなさまがあった。立ちびなの中に、五月人形の様な金時が鯉を抱いたのや、長いあごひげをたらした神武天皇が弓を持って、その弓の先に金の鳶がとまっているひなもあった。これは、五月人形と間違ってくれたのではないかと思う。

三月三日は、小学校で学芸会があった。母親達は、ショウノウの匂いのする着物を着て重箱にひなまつりの寿司を詰めて見に来ていた。お正月と共に、ひなまつりは、当時の人々にとって大切な行事だった。

参考に

童謡「うれしいひなまつり」は作詞サトウハチロー、作曲川村光陽、（一九三六）、今でも子どもたちと共に人々に親しまれている歌である。二番のおだいりさまとおひなさまは、サトウハチローの勘違いで？とも言われているようだ。

【ひなまつりの食べもの】

ひなあられ・・・・・・・白米や豆をいって甘いもの
　　砂糖などをまぶしたもの
白酒・・・・・・・・・桃花酒という、桃の花を酒に浮かべたもの
　　今は、甘酒で代用している
はまぐりのお吸い物・・・ひなまつりの頃は、潮干狩りを行なう
　　習慣があった
　　貝は、夫婦和合を意味する縁起物だった

館報編集委員　木村　恭子